

4-6 産業

琵琶湖集水域では1960年代後半以降加工組立型産業を主導とした急速な工業化と都市化を経験しました。その結果、琵琶湖の富栄養化や生物多様性の喪失をはじめとする環境悪化が1980年代頃から顕在化することになりました。しかし、市民、産業界そして行政の取組により、環境への負荷の小さい産業構造への転換が進んできています。

1. 近江商人を生み出した滋賀

日本海側と太平洋側そして東西を結ぶ交通の要衝である近江では、琵琶湖を囲む陸路と琵琶湖を渡る水路が古くから発達してきました。北国街道、中山道、東海道などの陸路、北陸と京都を結ぶ水路としての琵琶湖は人の移動と物資の輸送を支えてきました。滋賀は現在でも交通の要衝であり続けています。そのような地理的条件から天秤棒に象徴される東の特産品を西に、西の特産品を東に運ぶ商売を全国的に展開する「近江商人」が生まれました。

2. 工業化と都市化の進展

本格的な工業化と都市化は1960年代後半以降急速に進展することになります。琵琶湖周辺地域が陸上物流のかなめにあることから、加工組立型産業の中でも電気・電子産業や自動車部品および組立産業などの進出が進み、急速に製造業中心の産業構造への転換が進みました。またそれとともに、居住人口が急速に増え、都市化が進みました。

3. 琵琶湖の水質汚濁とその対策

その結果、琵琶湖への汚濁負荷は1960年代後半から1980年代にかけて急激に大きくなり、淡水赤潮の発生など琵琶湖の富栄養化が進みました。しかし、1979年の「琵琶湖条例」を契機に環境改善の取り組みを市民、事業者、行政が協力して進めてきました。産業界で

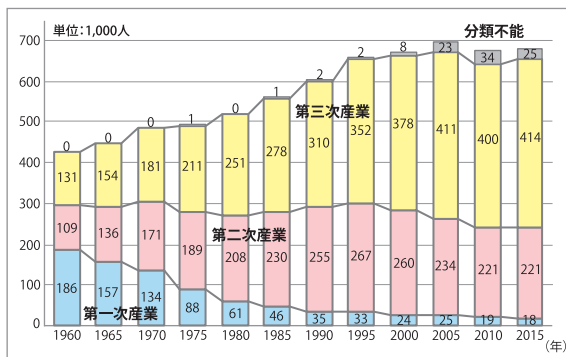


図4-6-1 産業別就業者数で見る滋賀県の産業構造 (国勢調査)

は廃水による汚濁負荷を削減する取り組みが広がり、琵琶湖への製造業からの負荷は大幅に削減されました。さらに、これらの取り組みは1990年代に環境マネジメントシステムの導入に多くの事業所が取り組むことにつながり、環境ビジネスを発展させようとする意欲が官民を通じて高まってきました。

4. 持続可能な産業構造へ

産業は社会が必要とするモノやサービスを作り出し、それを需要者に届けることがその使命です。そのために、材料を調達し、加工・処理し、製品を生産します。必要な材料を地域外から移入すればするほど、また加工・処理過程で出てくる不要な残さを再利用しないほど、環境中に排出される

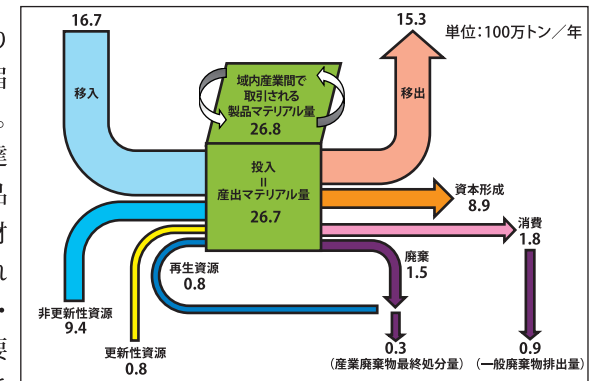


図4-6-2 滋賀県におけるマテリアル・フローの推計 (2000年値)

廃棄物、廃液、廃棄ガスが多くなります。しかし、産業が利用できる地球の資源、また環境中に排出された廃棄物を分解し無害化する生態系の能力には限界があります。したがって、より少ない資源とエネルギーを利用すること、自然界の中で循環する物質を利用することが求められています。

滋賀県の産業は資源を大量に消費しない加工組立型の産業が主流を占めていますが、それらが扱う材料は地域外から移入されるものが多く、また地域外との取引が大きな割合を占めているのが特徴です。産業過程に投入されるマテリアルの約6割が域外から移入され、産出したマテリアルの約6割弱が移出されています。域外との取引に依存した産業構造となっています。

持続可能な産業に転換するために、経済価値の生産を最大化しながら、移入するマテリアルを最小化し、地域内のマテリアルを循環的に利用することが求められます。これまでの事業所単位での資源・エネルギーの効率的利用と廃棄物削減から進んで、地域単位で農林業をはじめとする一次産業から二次、三次産業を含む多様な産業間の関係を強めることを通じて、循環型の産業構造に転換し、経済価値を生産することが求められています。

滋賀県立大学(名誉教授) 仁連 孝昭